

厚生労働行政推進調査事業費補助金（厚生労働科学特別研究事業）
（分担）研究報告書

他施設視察に関する報告（法医実務編）

研究分担者 松末 綾 福岡大学 医学部 講師

研究要旨

解剖実務は医師以外のスタッフによる解剖補助が不可欠であり、薬毒物分析や病理標本の作製など多岐にわたる専門知識と技術が必要とされる。法医学分野で働く医師以外のスタッフの技術向上と教育システムの構築のために、解剖実務が多い3大学法医学講座を見学して工夫や体制を見学した。各大学講座において多くの工夫がなされており、参考になった。知識や技術を学ぶだけでなく、活発な人材交流をすることで情報交換が可能となり、働く上でのモチベーション向上にも繋がると考える。

A. 研究目的

解剖実務は医師以外のスタッフによる解剖補助が不可欠である。さらに、解剖後の検査では、中毒学的検査や病理標本作成が必要であり、それぞれの専門知識や技術が必要となる。本研究では、医師以外のスタッフの知識を深め、技術を向上させるための教育活動を目的とする。

B. 研究方法

研究分担者、本大学技師1名、他大学技師1名の計3名とともに、解剖体制や検査体制が充実している大学、医師以外のスタッフが活躍している大学を視察し、解剖や施設見学を行った。また、様々な職種のスタッフと、効率的な解剖や検査を行うための情報交換を行った。

C. 研究結果

2025年1月27日、A大学で解剖2件を見学した。警察への説明にも立会った。A大学では、ほぼ全ての症例で解剖前にCT検査を行い、解剖時に着目すべきポイントを予め把握していた。音声入力ソフトを使用して筆記要員を減らすとともに、解剖終了後に細かな解剖所見を警察に文書で提供していた。さらに、解剖中に写真をモニターでリアルタイムに確認できるシステムを導入しており、写真のピントや画角が悪い場合、その場で再撮影を指示していた。室内の壁に写真の撮り方、NG例も掲載していた。解剖中に様々な検査も行ってい

た。執刀医以外のスタッフも効率よく解剖の補助をしていた。それぞれのスタッフが、どの立ち位置でも仕事ができるように交代制で補助をしており、スタッフが欠勤しても解剖が行えるようになっていた。検案書を手書きではなく入力システムで作成していた。

2025年1月28日、B大学で解剖1件と検査施設並びに新しい解剖室を見学した。B大学では、執刀医が所見を自分で記憶し、解剖後に所見を入力していた。必要な時は音声入力ソフトを使用することであった。執刀医以外のスタッフも効率よく解剖の補助をしており、指示がなくても自分のすべき仕事を行っていた。医師以外の教員や技術職員が交代制で解剖の補助をしているとのことであった。執刀医は、入力システムを用いて、解剖所見及び検案書を解剖後に記載していた。数値などの書記のみ警察官が実施していた。解剖室の近くに検査施設があり、CO測定やアルコール、薬毒物検査を行っていた。新しい解剖室は動線が良く、搬入、体重測定、CT撮影、解剖台へとスムーズにご遺体を移動することができるようになっていた。清潔エリアと不潔エリアが明確であった。試料を保存するための-80度の冷凍庫も解剖室の近くに設置していた。組織標本のための切り出しも効率よく行えるよう部屋の設計に工夫がされていた。

2025年1月29日、C大学で解剖2件と検査施設を見学した。C大学では、年間約1000件もの解剖を行えるように、スタッフや設備が充実していた。ご遺体を乗せた車の到着がスタッフの部屋からモニターで確認できるようになっていた。ご遺体の搬入から搬出までの一連の流れが円滑に進められていた。ほぼ全ての症例で解剖前にCT検査を行っていた。2台の解剖台で同時に解剖を行っていた。1つの解剖台で、執刀医1人と補助1人あるいは2人で解剖を行っており、丁寧でありながらも短時間で効率よく解剖を進めていた。執刀医が所見を自分で記憶し、解剖後に所見を入力していた。執刀医が撮影した写真は清潔なパソコンに挿入されたUSBメモリに自動で転送されていた。隣の部屋で解剖中に検査を行っていた。複数体を同時に行うため、コンタミネーション等を防ぐための工夫（2つの解剖台をAとBとしており、AとBはそれぞれのスペースで各検査を行うなど）がなされていた。感染症対策も徹底されており、清潔な解剖室が維持されていた。膨大な試料を効率的に検査する体制も整っていた。

D. 考察

今回見学した全ての大学は、解剖が丁寧に必要な所見を細かく取得しているにも関わらず、解剖時間が短かった。執刀医以外のスタッフの動きも臨機応変であり、全身臓器の摘出を行える高い技術を持っていた。解剖所見を高いレベルで把握できる訓練がされており、スタッフの教育が行き届いていると感じた。多検体の検査を効率的にこなす体制も整っており、理想的な死因究明の現場を見学することができた。

所属している大学の解剖や検査しか知らない場合、従来の方法で行うことに疑問を持たないことも多い。他大学の解剖や検査を見学することで、より効率的な方法や使用しやすい器具、新しい検査を知ることができ、自分の大学の改善点を見いだせた。特に技師が行う作業について導入したい箇所が多かった。例として、臓器保存用パックを用いて保存場所を最小限に抑える。包埋カセットの識別番号を専用機器にて印字あるいは専用マーカーにて記入し、組織上に鉛筆の粉が混入するなどのコンタミネーションを減らし、診やすい病理組織標本作製する。肋骨剪刀の使いづらさを剪

定はさみにより解消する。青酸ガスの定性試験や、病理組織作製の際の脱脂・脱灰など、自分の大学では行っていない検査や前処理を多く知ることができた。同じ立場のスタッフ同士にしか分かり合えない問題を大学間で共有し、解決するためにアイデアを出し合うことができた。医師以外のスタッフも情報交換する機会を与えることが大事である。

今回見学した大学は、教員以外のスタッフも研究を行い学会で発表するなど意識も高い。発表に必要な費用も教室で負担をしている。本人の希望があれば研究発表の機会を与えることで実務へのモチベーションも上がる。職種にとらわれずいろいろな経験をさせることも大事であると感じた。

E. 結論

解剖体制や検査体制が充実している大学を見学することは、医師以外のスタッフにも非常に勉強になった。見学後に実際に自分の大学で導入した器具や手法もあり、業務の効率化ができた。また、他大学に知り合いができたことで、今後も情報交換を行うことができるようになった。このような機会を設けることで、スタッフが働きやすく、より活躍できる職場環境へと改善することが可能となる。

F. 健康危険情報

該当なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

該当なし。

2. 学会発表

該当なし。

3. 関連した実務活動

該当なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

該当なし。